

また、内堀跡内の1層（最上層）からは明治期の^{かたがみえつ}型紙絵付けされた染付磁器が出土し、堀が当該期に埋められたことが想定された。地山は地表面下約1.1～1.2mにおいて確認された。

小 結 これまで、磐城平城の内堀はJR常磐線の線路敷下にあるため、すでに^{いんめつ}湮滅しているとの理解が一般的であった。しかし、今回の確認調査により、常磐線のホームから20mほど南の位置に内堀の立ち上がり（南岸）が検出され、堀の^{きていめん}基底面直上には江戸期の様々な遺物が出土することが確認された。加えて、内堀の普請以前の遺構（素掘りの柱穴）と、内堀廃絶後埋め戻して造られた明治期の石組遺構も検出され、平低地における中世末葉から明治期にかかる遺構が良好な状態で確認された意義はきわめて大きい。

（高島好一）

（5）揚 土 地 区

① 平第一小学校校舎改築事業の発掘調査

平成18年（2006）、いわき市立平第一小学校校舎改築工事に先立ち、旧校舎中庭周辺の971㎡を対象として発掘調査が実施された。いわき市平字揚土に所在する。

概 要 中世段階の盛土と整地による大規模普請、堀跡2条、土坑1基、さらに、江戸時代以降の土坑13基、溝状遺構1条が検出され、縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、かわらけ、瓦、木製品、石器・石製品、金属製品、動植物遺体など約8,000点の遺物が出土している。

基本層序 第1層は現表土、第2層は校舎造成当時の攪乱、第3層は江戸時代の遺構が確認される堆積土、第4層は中世の盛土と整地層、第5層は調査区内で最も下層で確認された樹枝やクルミなどの種子を含む灰色砂質土を主体とする水性堆積土で、東側から西側に向かって緩やかに堆積している。砂質土が带状に^{こそうたいせき}互層堆積していることなどから湿地のような環境にあったことが考えられる。

ア 中 世

堀跡2条、土坑2基および盛土と整地による大規模普請が検出された。第5層上には、西側では厚さ約1～4mの盛土、東側ではシルトブロックと小礫が混在する層と粘質土と小礫の混在する層などが固められた状態で互層に堆積している。傾斜地を盛土するなど大規模普請の様相を明らかにすることができた。

堀 跡 2条の堀跡は、重複して大規模普請（第4層）を掘り込んで構築されている。下層の第2号堀跡は、北東－南西方向に構築され、北東側は調査区外へ続き、南西側は立ち上がりの深さが浅くなる。検出規模は、長さは12.3m、上端幅は3.3～4.7m、深さは2.8mを測り、断面は、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる^{はこやげんがた}箱薬研形となる。

遺物は、かわらけ、漆器碗、貝や種子などの自然遺体が出土している。かわらけは46点出土している。器形や器面に残された特徴から15世紀後半に位置づけられ、その多くに煤痕が認められる。漆器碗は2点出土しており、共に^{まさめど}榎目取りの材を用いている。ひと



図100 南上空から見た揚土地区 (中央付近が平第一小学校発掘調査区)



図101 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査区近景 (中央の凹みが第1号堀跡)

つは上半部を欠損するが、高台部底径6.4cmで内外面に赤色漆が塗布される。他方は口縁部径14.5cm、高台部底径7.2cm、器高8.4cmの大ぶりの椀で、内面が赤色漆、外面は黒色系漆の上に赤色漆で「橘」と思われる草花文を描く。自然遺体はアワビやカキなどの貝類やモモなどの種子が出土している。

上層の第1号堀跡は、第2号堀跡埋没後にわずかに西にずれた位置に掘られ、南北両端ともに調査区外へ延びる。検出規模は長さ12.4m、上端幅は1.9～2.7m、深さは60～80cmで、断面は内彎気味に外傾し立ち上がるレンズ状となる。

遺物は、かわらけ、陶器、木製の切篋のほか、イヌなどの獣骨や種子などの自然遺体が出土している。かわらけは49点出土しており、器形や器面に残された特徴から15世紀後半に位置づけられる。多くに油痕が認められる。陶器は古瀬戸の破片資料がある。木製の切篋は、全長35.5cmの大型品である。このほか、北宋銭「紹聖元寶」が出土している。

土 坑 第1号堀跡の底面を掘り込んで検出された第8号土坑は、径約75cmの円形で、深さは約60cmである。内部からは拳大の礫が多数出土としている。遺物は、15世紀代の瀬戸美濃の灰釉平碗、16世紀後葉の中国景德鎮窯の青花玉取獅子文皿、16世紀の志戸呂とみられる茶壺などの陶磁器のほか、魚骨・獣骨などの動物遺体や樹枝などの自然遺体が出土している。

小 結 中世段階において、盛土および版築による大規模な造成(普請)が確認された。こうした造成は城館築城にともなう普請と考えられ、本台地における平場の拡幅と搔樋小路側との高低差の強化を目的として実施した行為と考えられる。

また、普請を掘り込んで構築され東西方向に走る堀跡は、本平場の中央部を東西に遮断することを目的に構築されたものと想定される。さらに、2条の堀跡から出土したかわらけの年代から共に15世紀後半の近い時期に比定される。短期間での造り替えが想定されると同時に、普請も15世紀中頃と想定することも難くないと考えられる。第1号堀跡より古い第2号堀跡は、調査区の南側端で基底面が浅くなることから、南側には土橋の存在が推察される。

歴史概観 嘉吉2年(1442)11月から翌年4月頃にかけて、岩城氏庶流の岩城隆忠が岩城惣領家の左馬助と舎弟彦次郎清隆兄弟の内紛に介入している。武力衝突により左馬助が自害。文安3・4年(1446・1447)には、岩城清隆・隆忠方と岩崎氏間で衝突し、文安4年(1447)には講和の運びとなる。この時の講和の条件のひとつが、大館城の守備を隆忠方から岩崎方に移すことで、岩崎氏が大館城を回復している。岩城氏が大館城を再び手に入れるのは岩崎氏の滅亡を待たなければならない。長禄4年(1460)、隆忠は足利義政に古河公方成氏の討伐を命じられている。寛正2年(1461)、隆忠は中山氏に小泉・藁谷・今新田・臼磯の4箇村の所領をあてがい同心するよう命じている。寛正7年(1466)には金成氏の所領を安堵し、岡本氏を従属させている。応仁元年(1467)には応仁の乱がおこる。応仁3年(1469)、岩城親隆は上遠野鶴松丸と亀千代丸の兄弟の対立に舎弟鶴松丸と連携し、上遠野氏にくさびを打ち込んでいる。文明6年(1474)、檜葉氏の攻略に貢献した猪狩氏に三箇村の成敗権を安堵している。文明7年(1475)、岩城親隆は檜葉郡を制圧。文明15年(1483)頃、岩城親隆・常隆が白土城から大館城(飯野平城)へ本拠を移す。文明17年(1485)、岩城親隆・

常隆親子が佐竹^{さ たけ}の乱の抗争に介入し、多珂郡車城^{た がくくるまじょう}を攻略。このような経過の中で、岩城氏は国人領主^{こくじんりょうしゅ}から、戦国大名^{せんごくだいみょう}としての基盤を確立していったものと考えられる。

以上のことから、15世紀後半に行われた盛土および版築による拡幅整地などの大規模な普請は、このような時代背景に起因しており、大館城（飯野平城）に関連する遺構と思われる。また、盛土などの大規模な普請は、現在の地名である「揚土^{あげつち}」の命名にも関係している可能性が考えられる。

イ 近 世

校舎造成時の整地により、建物跡などの遺構が相当数削平されているものと考えられたが、調査では3基の土坑が検出された。

土 坑 第1号土坑は、円形に掘り込んだ土坑に木桶^{き おけ}が埋納^{まいのう}されている。直径約140cm・残存高約20～35cmを測る。木桶の側板は残片しか確認できなかったが、底板は8枚で構成されていた。腐食が著しいものの、最大の板材では幅約20cm・厚さ約5cmが遺存していた。遺物は、陶磁器、瓦、石製品、金属製品などが出土している。

第2号土坑も円形に掘り込まれた土坑で、木桶が埋納されている。直径98cm・残存高約70cmを測る。木桶は幅約12cm・長さ約70cm、厚さ3cmの26枚の側板と幅10～14cm・長さ85cm・厚さ5cmの7枚の底板からなり、それぞれ合わせ目は竹釘で接合されている。遺物は、陶磁器、瓦、金属製品のほか、獣骨・魚骨・種子などの動・植物遺体が出土している。

第7号土坑は、南側半分が調査区南壁内に入り込んでいる。平面は不正楕円形とみられ、長軸の残存長62cm・短軸長82cm、深さ約11～37cmを測る。遺物は、陶磁器、かわらけ、瓦、石製品、金属製品、材のほか種子などの自然遺体が出土している。

この他に検出された土坑には、陶磁器や瓦などと共にガラスなどが混在しており、明治時代以降のゴミ穴と考えられる。

3基(第1・2・7号)の土坑は、江戸時代に属すると考えられる。木桶が埋納された第1・2号土坑について、その性格を知ることがを目的に桶内最下層堆積土壌を分析した結果、回虫および稲の花粉が検出され、木桶埋納土坑は厠であること、また、稲の花粉については、民俗例から便所内の跳ね返りを防ぐため藁を敷いたのではないかという報告がなされた。

遺 物 陶磁器、瓦のほか、石器・石製品、金属製品、銭貨などがある。

磁器は、碗・皿・瓶・段重・火入れ・香炉^{こうろ}・水滴^{すいでき}・蓋^{ふた}・仏飯器^{ぶつばんき}などがあり、生産地の主体は、肥前である。次いで波佐見^{はさみ}、瀬戸美濃、中国産がある。肥前はほぼすべての器種を具備しており、中国産は皿ばかりではなく、碗類の出土も確認されている。年代は4期に大別され、Ⅰ期が17世紀以前、Ⅱ期が17世紀末から18世紀、Ⅲ期が18世紀末から19世紀前半、Ⅳ期が19世紀以降である。肥前と波佐見はⅡ～Ⅲ期に多く見られる。Ⅳ期も圧倒的に肥前が多いが、後半になると瀬戸美濃が量を増やしている。全体的な出土傾向を見ても、Ⅲ期・Ⅳ期の肥前の出土率が圧倒的に多い。これは、18世紀末から19世紀中頃に最も肥前の出土量が増える全国的な傾向と合致している。

陶器は、碗・皿・水盤^{すいばん}・鉢・鉢^{ゆきひらなべ}・蓋・瓶・行平鍋^{がしつどき}・土鍋・仏飯器・壺類、瓦質土器では・火

入れ・灯明・香炉・水指・焼塩壺・敷瓦・風炉・天目台などがある。生産地については、唐津などがわずかに認められるが、おおむね瀬戸美濃と大堀相馬で占められる。磁器同様4期に大別され、各期共に磁器と合致している。磁器と大きく異なる点は、志野や織部など美濃が目立つ。特に沓形碗や葉茶壺などの茶道具が多く出土していることが特徴的である。時期的には15～16世紀まで遡る資料は、第1・2号堀跡に関係する遺物と考えられる。Ⅱ期になるとおおむね瀬戸美濃が占め、器種も多くなる。Ⅲ期になるとそれまで主体をなしてきた瀬戸美濃が減少し、大堀相馬が増えてくる。そしてⅣ期は大堀相馬が主体となる。これは大堀相馬の画期が18世紀末から19世紀はじめにあり、こうした時期に合致するものと考えられる。

瓦は、軒棧瓦・丸瓦・棧瓦などが出土している。軒棧瓦は軒丸部と軒平部の文様構成がいくつかの組合せを持っていることが分かった。

石器は、弥生時代の磨製石斧や剝片、近世～近代にかかる砥石・石板・石筆などである。

金属製品は、刀子と4点の煙管雁首がある。銭貨は、裏面に十一波の背文が認められる寛永通寶や新寛永銭が出土している。

小 結 発掘調査地周辺の土地利用を概観すると、「正保平城絵図控」（正保年間〔1644～1647〕）には、長坂側に足軽屋敷、子鋤倉稲荷神社側に樹木畑、「磐城平古地図」（元文2～延享4年〔1737～1747〕）には、長坂側に東から侍屋敷と鷹部屋、子鋤倉稲荷神社側に侍屋敷、「平城下古地図」（享保20年頃〔1735〕）には、長坂側に東から江原小十郎、穂鷹吉兵衛、子鋤倉稲荷神社側に東から遠山弥一衛、蓼科小文治、加藤源五兵衛、「奥州磐城平城下絵図」（寛延2年〔1749〕）には、長坂側に東から大嶋五兵衛、松井茂兵衛、御鷹部屋、子鋤倉稲荷神社側に東から渡部又太郎、土方代八、芝銀右衛門、久米兵蔵、「磐城平城下絵図（岩城平ノ絵図）」（寛政元年〔1789〕）には、長坂側に東から則武三太夫、御鷹部屋、子鋤倉稲荷神社側に東から稲葉又右エ門、廣瀬孫太夫、服部庄太左エ門、「磐城平御家中絵図」（安藤期）には、長坂側に東から原万右エ門、室周治、子鋤倉稲荷神社側に東から松本弘人、青沼助兵衛、廣瀬鉄蔵の記載がある。

これらの武士の中で、穂鷹吉兵衛や加藤源五兵衛は、「慶長8年内藤政長100石以上分限」や「寛文11年内藤義概御家中分限帳」などにその名を確認できる。このことから、正保年間（1644～1647）頃には足軽屋敷として、元禄6年（1696）頃以降は武家屋敷として利用されていることが分かる。また、享保20年（1735）頃には認められないが、元禄6年（1735）、寛延2年（1749）、寛政元年（1789）には御鷹部屋の存在が確認できる。

（樫村友延）

② 平第一小学校校舎改築事業の確認調査

平成18年（2006）、いわき市立平第一小学校校舎改築工事に先立ち、校舎中庭および校舎南側の一部を含む2,200㎡を対象に、15箇所の特レンチを設定して実施した。

調査概要 1号特レンチでは整地層が確認された。2号特レンチでは、攪乱土坑が検出され、東側から近世陶磁器やかわらけが出土している。4・5号特レンチは、廃棄土坑が検出され、かわらけ、陶磁器のほかに瓦が出土している。また、5号特レンチでは溝



図102 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査出土遺物（1）



図103 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査出土遺物（2）



図104 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査出土遺物（3）



図105 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査出土遺物（4）



大型品



小・中型品

図106 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査出土遺物（5）



図107 揚土地区・平第一小学校地点発掘調査出土遺物（6）

跡も検出されている。さらに瓦がまとまって出土している。6号トレンチも5号トレンチと同様の内容であった。校舎中庭を分断する通路を挟む東側に設定した7号トレンチでは、北側から整地層が確認された。また、江戸時代の遺物包含層も検出されている。8号トレンチにも遺物包含層と整地層が認められ、陶磁器、瓦のほかに鉄製品(刀子)が出土し、炭化物が広く散在している。9～13号トレンチでは2m近い現代の攪乱があり、遺構検出までには至らなかった。14・15号トレンチは中央の通路付近に設定したため、6・7号トレンチと同様の内容であった。

小 結 1・7・8号トレンチから整地層が検出され、また、規模不明の廃棄土坑が2・4～6号トレンチから、さらに14号トレンチからは土坑が検出され、堆積土の状況や出土遺物から江戸時代の遺構と考えられる。

また、廃棄土坑は北側校舎の方向へ広がる可能性が高い。したがって、中庭一帯が磐城平城の時期から近代における遺物廃棄場所であったことが想定された。

(高島好一)

(6) 桜 町 地 区

① 桜町遺跡の発掘調査

桜町遺跡は、磐城平城の本丸跡が立地する台地の北西端部に位置している。調査区を挟んで、東側には福島県立磐城桜が丘高等学校、西側には磐城平藩初代藩主忠政が父元忠の菩提を弔うために建立した淵室山長源寺えんしつさんちやうげんじが所在する。弥生時代から平安時代の遺物が散布する遺跡として古くから知られ、「物」字の古代印章が表面採取されたとも伝えられている。

発掘調査は、福島県立磐城桜が丘高等学校の運動場拡張工事にともない、工事により影響を受ける1,535㎡を対象に平成13年(2001)4月から7月にかけて実施された。

調査概要 竪穴住居跡(古墳～平安時代)、古墳跡、土坑、溝跡、柱穴、井戸跡などの遺構が検出され、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器、石器・石製品、金属製品、銭貨、人骨などの遺物が出土している。このうち、中・近世に属すると推定される遺構は、土坑(墓跡含む)、溝跡(道跡含む)、柱穴が、遺物ではかわらけ、陶磁器、金属製品、銭貨、人骨などがある。

遺 構 67基の土坑のうち48基が中・近世の土坑墓と推定される。検出層位は2面あり、上層で37基、下層で7基が検出された。上層は調査区西側に隣接する長源寺の墓跡、下層は慶長8年(1603)長源寺建立に際し現在の久保町くぼちやうに移転した普門寺ふもんじ(開基は正応4年[1291]と伝えられる)の墓跡と推定される。また、16基には墓標穴と推定される小穴1～2個が付属する。土坑内からは、人骨とともにかわらけ、陶磁器、金属製品、銭貨などの副葬品が出土している。陶磁器は、18世紀前半から19世紀前半の肥前、大堀相馬がある。中世は、15世紀末の大窯Ⅰ期や16～17世紀に位置づけられる中国景德鎮窯けいとくちんやうの青花がある。一方、第35号土坑からはかわらけが20点以上出土している。上層の墓跡では、人骨や副葬品などはほとんど認められない。長源寺住職への聞き取り調査により、「明治9年に寺域を縮小した際、調査地点付近にあった墓地は移転した。その際、移転の対象と



図108 西上空から見た桜町遺跡



図109 真上から見た桜町遺跡発掘調査区（小形の円形遺構が墓坑群）



図110 桜町遺跡発掘調査出土遺物(1)



図111 桜町遺跡発掘調査出土遺物(2)

なった墓はすべて掘り起こした」ことが判明している。また、墓跡の上位堆積層からは、人骨や陶磁器、金属製品などが混在した状態で検出されており、墓地移転によるものと推定される。

以上、上層が長源寺建立の慶長16年(1611)から墓地が移転された明治9年(1876)までの間、下層は出土した陶磁器に国産陶磁器が認められず、銭貨はすべて「永楽通寶」・「洪武通寶」などの中国銭であることから、構築は洪武通寶初鑄年(1368)から長源寺建立年(1611)までの間と推定される。

溝跡は7条検出された。調査区北端部で検出された第3号溝跡は、断面が「U」字形となる。堆積土には流水の痕跡は認められないことから、本溝跡は配水等を目的とした溝ではなく、通路的な施設と推定される。「磐城平古地図」(絵図6)によれば、本溝跡にあたる位置には丘陵上より北目町方面へ通じる道が描かれており、本溝跡が該当する可能性が高い。遺物はかわらけと陶磁器が出土し、江戸時代末頃に位置づけられる。

小 結 発掘調査により、磐城平城の所在する台地における縄文時代から明治時代にかかる様相の一端を解明することができた。なかでも、中・近世においては、南半部を中心に墓地として利用された証明として多数の土坑(墓坑)が検出された。人骨のほか、かわらけ、陶磁器、銭貨などの副葬品とみられる遺物も出土している。また、墓跡と推定される土坑には、底面や外辺部に墓標穴と推定される小穴が付属するものも少なくなく、当地方における中・近世墓の埋葬形態解明の一資料となった。墓地は普門寺、長源寺の2寺が連続的に使用したものと推定され、明治9年(1876)の墓地移転により本調査区における墓域としての利用は終了したようである。

陶磁器は、中国産、国産(瀬戸美濃、大堀、肥前)、ヨーロッパ産が出土している。中国産では、青白磁梅瓶(12世紀後半)、片切彫りの鎬蓮弁文青磁碗(13～14世紀代)、青花端反皿(15世紀後葉～16世紀前葉)、呉須手の青花皿(漳州窯系か:16世紀後葉～17世紀初頭)がある。国産陶器では、瀬戸の灰釉皿(15世紀後葉～16世紀初頭)、瀬戸の内剥ぎ灰釉皿(16世紀後葉)、肥前(唐津)の銅緑釉碗(17世紀)、肥前の京焼風陶器碗(17世紀後半)、大堀の灰釉碗(18世紀代)・仏飯器(灰釉・鉄釉流し掛け:18世紀代)がある。国産磁器は3点あり、すべて肥前磁器皿(18世紀代)である。このほか、ヨーロッパ産では硬質陶器皿(19世紀代)が2点出土している。

調査区北端部においては、江戸時代に存在した道跡と推定される溝跡が確認された。

(末永成清)

② 桜町(桜堀)地区の確認調査

平成26年(2014)、個人住宅建築に先立ち、建屋の基礎工事予定範囲に2箇所のトレンチを設定して実施した。本地点は、本丸跡から北西方に約600mの福島県立磐城桜が丘高等学校と道路を挟んだ南側に位置する。

1号トレンチ 対象地区の西側に9m×3mの規模で南北方向に設定した。現地表面から85cmの深さまで(第1・2層)は、既存の宅地造成時の整地層である。第3～7層は、段丘礫のブロックなどを含む黄褐色粘砂質土が北方に向かって急勾配に傾斜している。遺物の出土はなく時期は不明であるが、一時期に埋められた土と考えられる。さらに東側の

一部を深さ2.4mまで掘り下げたが、堆積状況は上層と同じであり、堀内の埋土と考えられる。

2号トレンチ 対象地区の東側に7m×3mの規模で南北方向に設定した。現地表面から75cmの深さまで(第1・2層)は、1号トレンチ同様既存の宅地造成時の整地層である。第3・4層も1号トレンチ同様段丘礫のブロックなどを含む黄褐色粘砂質土であるが急な傾斜はしていない。さらに東側の一部を深さ2.4mまで掘り下げたが、堆積状況は上層と同じであった。

小 結 城絵図に認められる桜堀^{さくらぼり}の確認を目的に2箇所のトレンチを設置したが、堀底の確認までは至らなかった。しかし、確認された大量の黄褐色粘砂質土は、桜堀を整地した際の埋土と考えることができる。時期については遺物の出土がなく不明である。

桜堀は、「正保平城絵図」以降「磐城平城付近戊辰當年の地圖」まで記載されている。「正保平城絵図」には東側にクランク箇所を見ることができるが、他の絵図はいずれも直線的で、「磐城平城付近戊辰當年の地圖」は山形に描かれている。

昭和40年代頃までの桜堀の中央から東側周辺は、南側の丘陵と約4～5mの標高差で堀跡が存在していた。しかし、現在の桜堀跡周辺は宅地化が進む中、平成26年(2014)4月25日、登録有形文化財に指定された「桜丘会館」^{おうきゅうかいかん}の道路を挟んだ南側の窪地に唯一名残りを見ることができる。

(檜村友延)

(7) 八幡小路地区

平成26年(2014)、東日本大震災後の復興公営住宅建築に先立ち、2,184㎡の対象地域に3箇所のトレンチを設定して実施した。

調査地点は、市道を挟んで北側には飯野八幡宮が鎮座する箇所にあたる。江戸時代初期の「正保平城絵図」には「侍屋敷」の記載があるが、明治36年発行の「岩城平城跡及ヒ附近戊辰當年の地圖」では「学校」、昭和初期の「平町全圖」では「刑務所」、昭和30年代の「平市街図」では「拘置所」とされ、現在に至っている。そして、調査直前までは「岩城少年鑑別支所」が建っていた。「学校」とは藩校の施政堂のことである。

1・3号トレンチ 磐城平城落城後の明治時代以降の盛土が確認された。厚さは50～100cm程度である。3号トレンチ下層からは、堅く締まった暗黄褐色土の堆積が確認された。本層は厚さ20cm程度であるが、磐城平城造成に関連する盛土(整地層)と想定される。また、本層上面から、上端幅1.6mの溝跡1条と、不整楕円形の土坑1基が検出された。土坑は、整地層を掘り込むかたちで、検出長1.5m、深さ60cmを測る。瀬戸灰釉小皿・かわらけと瓦質土器が出土し、いずれも中世の所産と考えられる。

4号トレンチ 近世の整地層下からは、磐城平城築城以前(中世)の遺構は検出されなかった。地山上面を確認面とするピットが2個確認されている。遺物の出土はなく、時期は不明である。

(木幡成雄)

(8) 平大館地区

平成21年(2009)、集合住宅建築に先立ち、4箇所のトレンチを設定して実施した。本地点は、好間川右岸の段丘上に立地し、周辺には縄文時代から平安時代の桜町遺跡や高月遺跡、高月館跡などが所在する。従前は社宅として利用されていた。

1号トレンチ 調査区北側に20m×3mの規模で設定した。地表面から遺構検出面までの深さは30～80cmで、地山は西に向って傾斜している。基本層序は、表土層と灰白色粘土層に大きく分けられる。

遺構は、墓跡11基、溝跡1条、ピット5個を検出した。墓跡は、平面形が方形と隅丸長方形の2種類がある。内部から木片(棺箱)とともに、歯、骨片、銭貨などが出土するものも認められた。隅丸長方形の墓跡は、最も大きな規模をもつもので長軸1.4m、短軸80cm、深さ約30cmを測る。所属時期は、出土遺物や検出状況より江戸時代に位置づけられる。

2号トレンチ 調査区東側に10m×3mの規模で設定した。地表面から1.4mの深さまで掘り下げたが、遺構の検出には至らなかった。社宅解体工事による攪乱を影響と推定される。

3号トレンチ 調査区西側に10m×3mの規模で設定した。地表面から遺構検出面までの深さは0.5～1.3mで、北に向かい深さが増している。基本層序は4層に分層される。第1層が盛土、第2層が灰白色粘土層、3層が黒褐色土層、4層が暗褐色土の遺物包含層となる。

遺構は土坑1基、ピット3個、遺物包含層1箇所が検出された。遺物包含層はトレンチ南西側に広がるものとみられ、土師器が出土する。土坑とピットの堆積土からは土師器片が出土するが、時期は不明である。

4号トレンチ 調査区の南側に20m×3mの規模で設定した。地表面から遺構検出面までの深さは0.55～1.10mで、東側は攪乱が顕著に認められる。基本層序は遺構検出面の上層は瓦礫の混在する土層が堆積するのである。

遺構はピットが3個検出された。遺構にともなう遺物はなく、所属時期は不明である。

小 結 3箇所のトレンチから遺構・遺物が検出された。周辺に比べ一段高い位置の1号トレンチでは、寛永通寶などが副葬された墓跡が検出された。3号トレンチ南側からは土師器を出土する土坑、4号トレンチ西側からはピットが検出された。

以上のことから、本調査区域では、江戸時代の墓域として利用されていたことが推定される。さらに、古代から江戸時代にかかる複合遺跡であることも明らかとなった。

(鈴木隆康)

(9) 薬王寺台地区

平成27年(2015)、松ヶ岡公園の再整備に先立ち、整備工事予定範囲内に9箇所のトレンチを設定して実施した。本地点は、いわき市平字^{やくおうじだい}薬王寺台3番地に位置する。

調査成果 トレンチ規模は、1号が10m×3.5m、2・6号が10m×3m、3号が7m×2m、4・8号が5m×3m、5号が8m×3m、7号が5m×2m、9号が3m×

2mである。

すべてのトレンチにおいて、遺構・遺物は検出されなかった。現在の公園開園時やそれ以降に掘削や削平等を著しく受けていることが最大の原因とみられる。

小 結 今回の調査地点は、現在の松ヶ岡公園敷地となっている。磐城平城絵図によると「薬王寺台」の標記が見られる空間であるが、確認調査においては、磐城平城に関連する遺構・遺物を確認することはできなかった。

(鈴木隆康)

(10) 高月遺跡・高月館跡

平成5年(1993)、福島県立磐城高等学校敷地に隣接する市道改良工事に先立ち、高月遺跡・高月館跡の発掘調査が実施された。調査区に隣接する「飯野屋敷」は、現在でも堀と土塁が残り、平成11年(1999)に「高月館跡」として市史跡に指定され、保護・保存されている。また、飯野屋敷の南側は、「枅形門」によって守られた屋敷地として表現され、この屋敷地は「高月屋敷」と記載されており、特別な屋敷地だったことが分かる。

「飯野屋敷」と「高月屋敷」を含む周知の埋蔵文化財包蔵地「高月館跡」の現況は、大部分が福島県立磐城高等学校校地となっている。発掘調査区は、「飯野屋敷」の南西方向に隣接する範囲にあたり、「平市街図」によれば、「侍屋敷」地内となる。

調査成果 確認調査を実施して遺構・遺物の内容を把握し、高い密度で遺構・遺物が検出された路線内について発掘調査を実施した。

調査は、高校造成時に厚く盛られた炭殻層^{たんがらそう}を含む盛土の除去から始め、厚さ約1～1.5mの盛土からは縄文土器や土師器とともに近世陶磁器類が多数出土した。

盛土下には、厚さ10～20cmの造成前の旧表土層が残存している。旧表土直下の黄褐色度を検出面とし、縄文・弥生・奈良・平安時代の遺構とともに、江戸時代の土坑、柱穴や井戸跡が検出された。土坑や竪穴状遺構からは、17世紀を主体とする肥前系の磁器を含む陶磁器、かわらけ(灯明皿)、金属製品(釘・煙管・銭貨)が廃棄された状態で出土している。

小 結 本調査区の現況は高校の敷地内であったため、遺構の存在は期待できなかったが、敷地造成による盛土が厚かったことから、縄文時代中期のフラスコ状土坑3基や平安時代の集落跡とともに、江戸時代の柱穴240個、井戸跡1基、溝跡など多数が検出された。

江戸時代の遺構からは、17世紀を主体とする陶磁器やかわらけが出土していることから、磐城平藩内藤氏時代の侍屋敷に関連する遺構が推定される。

(高島好一)

(11) 大 館 城 跡

平成26年(2014)に、公園整備事業に先立ち、本丸跡と推定されている箇所^{箇所}に東西15m・南北6m・深さ1.5mの規模で掘削計画が立てられたことから、掘削範囲すべてを調査範囲に設定し発掘調査を実施した。埋蔵文化財包蔵地としては、「大館城跡A地区」として登録されている。



図112 高月遺跡発掘調査出土遺物

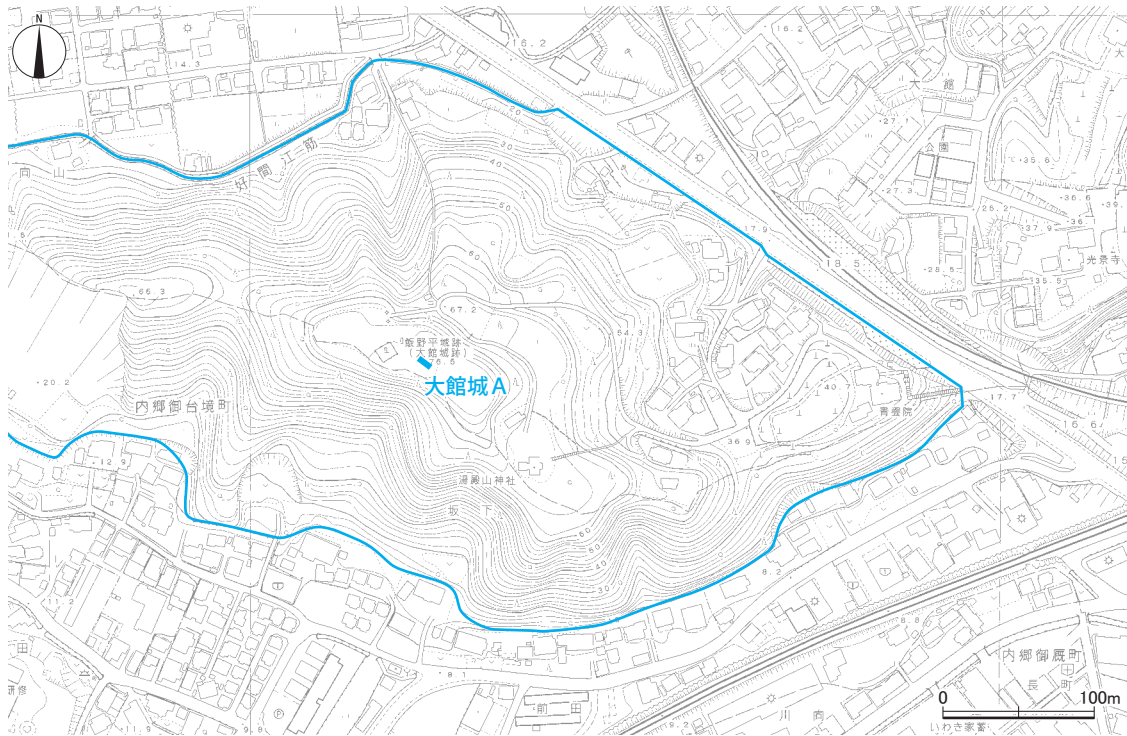


図113 大館城跡A地区の範囲と調査位置図



図114 真上から見た大館城跡A地区確認調査区全景(写真は合成)

概 要 大館城跡は、いわき市好間町下好間字大館・向山、平字大館、平字高月・字旧城跡、内郷御台境町坂下の広範囲に所在する。好間川と新川の間に位置する丘陵上に立地し、丘陵を分断する旧国道49号を境に南西側をA地区、北東側をB地区としている。戦国大名である岩城氏の居城跡として周知されており、曲輪・土塁・堀切^{ほりきり}などが現在でも良好に残されている。

現地表面から約30cmで地山であるシルト岩盤が確認された。堆積土は2層に分層され、第1層は現表土である黒色の腐植土層、第2層はにぶい黄褐色土層である。第2層は軟弱

で、層中にシルト岩の小礫を多量に含むことから、整地による削平時の堆積土と推定される。岩盤上面からは、竪穴建物跡1棟、土坑3基、柱穴145個が検出された。

竪穴建物跡 調査範囲の北東隅で確認された。検出範囲が狭小のため、形状や規模は不明である。検出面から床面までの深さは21cmほどである。遺物は土師器片が出土したが、すべて小片のため所属時期は不明である。

土 坑 検出状況から第2・3号土坑の2基が中世に属するものと推定される。第2号土坑は、長軸3.64m・短軸2.56mの楕円形で、深さは73cmを測る。底面はほぼ平坦で、南壁際には3個の小穴が直線状に約1m間隔で穿^{うが}たれている。最下層の堆積土には水性堆積土壌と推定される細粒の粘質土が認められ、その上位をシルト岩の小礫を多量に含む粗粒の土壌が覆っていることから、本土坑は水溜めなどの用途のために掘削され、廃絶後に埋め戻されたものと推定される。遺物は、かわらけ、常滑系陶器甕・中国産白磁皿^{とこなめけいとう き かめ はくじざら}が出土している。かわらけは15～16世紀、白磁皿は15世紀に位置づけられる。

第3号土坑は、一部が調査区外となるが、平面形は楕円形と推定され、規模は検出値で長軸86cm、深さは10cmを測る。遺物の出土はなかった。

柱 穴 地山である岩盤を掘削しており、平面形は円形・楕円形・隅丸方形・方形が認められる。規模は直径が40～60cmの比較的大型のものと、20cm前後の小型のものの2種に大別される。深さは残存値で10cm以下のごく浅いものから、1mを超える深いものまで認められる。浅い柱穴には、削平により上部が失われたものもあると推定される。これらは間隔や規模・形状などから、掘立柱建物跡および柱穴列を複数棟復元することが可能である。

遺物は、一部の柱穴からかわらけや石製品(碁石^{いし})が出土している。かわらけの中には内面に煤^{すす}が付着しているものもあり、灯明皿^{とうみょうざら}としての使用が想定される。出土遺物の年代と、土坑や掘立柱建物跡・柱穴列を含む柱穴群の重複関係より、柱穴から想定される掘立柱建物跡の時期は、おおむね15～16世紀代に位置づけられ、複数回の建て替えがあったものと推定される。

小 結 確認調査では、掘立柱建物跡や柱穴列、土坑などの遺構が検出され、15～16世紀代の遺物が出土している。出土遺物の年代(15～16世紀代)からみれば、掘立柱建物跡や柱穴などは中世岩城氏の大館城に関連するものと推定される。

大館城跡の主郭とされる場所において、数時期の中世の掘立柱建物跡や柱穴列などの遺構が初めて確認された意義は大きい。この成果は、岩城氏の白土城からの移動時期や築城時期など、遺構変遷を探る手がかりとして重要な資料となった。大館城は、岩城常隆が文明15年(1483)頃に築き、いわき地方の政治・経済の基盤をつくった場所である。また、近世の磐城平城と区別するため、飯野平城の名称も使われている。文安4年(1447)の文書に「大館」が現れるので、築城はそれ以前とみられる。

調査後には、現状保存されることになり、平成29年(2017)には本丸跡が「大館城跡」として市史跡に指定された。

(末永成清)

引用・参考文献

- 佐藤 典邦 1995 『年報5』 財団法人いわき市教育文化事業団
- 末永 成清・斉藤 美穂
2002 『桜町遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第91冊 いわき市教育委員会
- 中山 雅弘・高島 好一他
2006 『平成17年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第113冊 いわき市教育委員会
- 檜村 友延・松島 直実
2006 『平城跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書117冊 いわき市教育委員会
- 吉田 生哉他
2008 『平城跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第127冊 いわき市教育委員会
- 鈴木 隆康他
2010 『平成21年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第139冊 いわき市教育委員会
- 檜村 友延他
2011 『平成22年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第145冊 いわき市教育委員会
- 高島 好一・猪狩みち子・木幡 成雄
2012 『平成23年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第149冊 いわき市教育委員会
- 鈴木 隆康他
2015 『平成26年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第171冊 いわき市教育委員会
- 檜村 友延・鈴木 隆康・江川 逸生他
2016 『平成27年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第176冊 いわき市教育委員会
- 鈴木 隆康他
2018 『平成29年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第184冊 いわき市教育委員会
- 江川 逸生・千田 一志他
2020 『令和元年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第187冊 いわき市教育委員会
- 木次谷裕子・松嶋 直実他
2021 『令和2年度市内遺跡試掘調査報告』いわき市埋蔵文化財調査報告第190冊 いわき市教育委員会